

10.52

石門曉子

「現代社会の文脈のなかで論じる」家族が「政治性を帶びた存在である」といふ認識

本書は6章からなる論文集であるが、序「家族のオルタナティブと新たな生の基盤を求めて——本書のねらい」(田和恵)で述べられているように、いすれの章も「これまでの「家族」にとらわれない、生きる場・関係の可能性を問おう」とする姿勢で貫かれている。相対化の対象とされる「家族」は異性愛に基づく一組の男女が結婚をし、子どもをもち、性別役割分業に基づいてケニア機能を果たすという意味での「家族」であり、いわゆる「近代家族」を指す。

「家族」を前提とした社会制度や「家族」イメージによって、その枠を超えた同性愛カップルや再婚家族が問題を抱え、先行研究の成果も参照されつつ、具体的に示されている。また、6章は新たな家族変動論の構築を目指す試みでもある。

5章、6章とともに実証編の2部を構成する4章「若者との自立／自律と共同性の創造——シェアハウジング」(久保田裕之)は、「近代家族」の特徴である閉鎖性に目を向けて、「二人性」という独自の概念を提示しながら、シェアハウジングを実践する若者への聞き取り調査をもとに考察を進め、「家族」以外の他者との共同生活が「家族」を相対化し、大人としての自立／自律に向かう有効な契機になりうる可能性を論じる。

著者らの批判的なまなざしの根底にあるのは、「家族」が「政治性」を帯びた存在であるという認識である。特に理論編の第1部を構成する1章から3章はいずれも、異性愛主義に基づく単婚制を批判し、法的制度としての婚姻の廃止などを主張するファイゾマンの議論を参考しつつ論が進められていることからもわかるように、刺激的な疑問や見解を提示している。「家族」の「政治性」を正面から論じ

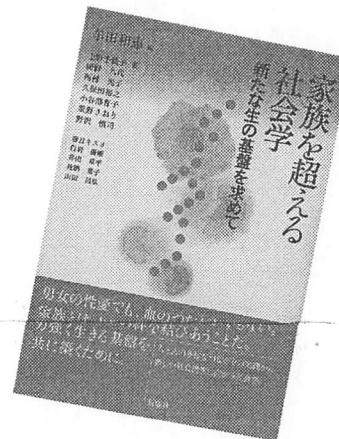
「ケアの分配公正をめぐつて」(上野千鶴子)は、「親密な圈」概念や性別役割分担の解消を求める「平等主義家族」の限界を指摘した後、「依存的な他者」との持続的な関係のそれ自体に選択の有無が積極的に与えられているか否かによって分けられる4分類――を指す「ケアの紳」に着目し、「ケアの人権」の4象限――ケアの受け手とケアの与え手のそれぞれに選択の有無が積極的に与えられているか否か――によって分けられる4分類――を提示する。

いずれの章も批判精神に富む魅力的な論考だが、本全体の統一性や課題設定に関わっていくつか疑問を感じる。たとえば4章では「人暮らしの場合には誰が家事をやったかがすぐにわかつてしまい、互酬性への期待が厳格化すると指摘されているが、5章では同性愛カップルは異性愛カップルよりも柔軟に分担している事例が紹介される。どちらの知見も興味深いが、家庭分担をめぐる緊張関係は二人どいう人数の問題によってひきおこされるのか、それとも異性愛主義が問題なのか。これらの見知をつけあわせた検討がなされていないことが惜しまれる。また、「序」では「オルタナティブな家族」ではなく「家族のオルタナティブ」を論じるという方針が述べられるが、5章と6章は「オルタナティブな家族」ではなく「家族のオルタナティブ」を論じるといふ方針が述べられるように思われる。このよう

「家族のオルタナティブ」を論じるという「序」で提起された問い合わせの一つの答えが、山田昌弘によるコラム「家族のオルタナティブ」は可能か?」に示されているように思われる。山田は「家族のオルタナティブ」に関わり、ケアの提供といった機能的必要なについては家族以外の集団や制度が代替できるが、アイデンティティの保証を家族以外が担うことは難しいのではないか、と指摘する。これに対する各筆者の見解も読者としては知りたいところである。

この山田のコラムのほかに、4つのコラム(「高齢者虐待」「出産と家族」「ひきこもりと家族」「シングルマザー」)と2つのトピックス(「ワンマン・リブのコレクティイブハウジングの理念と実践」)も収められている。また、各章の最後には3冊の関連文献が紹介されており、読者の理解を助ける工夫が随所に凝らされている。

本書は「近代家族」論を踏まえつつ、「家族とは何か」という根源的な問いを現代社会の文脈のなかで論じている。社会学に限らず、家族に关心を持つ読者に一読をお勧めしたい。



▼ 家族を超える社会学  
新田和恵 編

新曜社  
12・10刊 四六判二三四頁 本体二二〇〇円